

トム・ストッパード作『レオポルトシュタット』をめぐって (Y. Igarashi) [J]

日本独文学会のホームページに寄せるコラムとなれば、ドイツ語圏の作家やドイツ語の作品を取り上げるべきところであるのかもしれないが、今回私をご紹介したいのは、イギリスの劇作家により英語で書かれた劇作品である。いささか場違いな感はあるものの、しかし、ウィーンに暮らすユダヤ人一家の一大叙事詩という内容から、おそらくは独文関係者の方々にも興味や関心を持っていただけるものと思う。どうかしばしのお付き合いをお願いしたい。

1. トム・ストッパード その生い立ちとキャリア

劇作家トム・ストッパード (Sir Tom Stoppard)。1937年、チェコスロヴァキアにてユダヤ系の家系に生まれた彼は、本名をトマーシュ・ストラウスレル (Tomáš Straussler) といった。1939年、ナチのチェコスロヴァキア侵攻に伴い、一家はシンガポールへ移住する。しかし、1942年には日本軍がシンガポールを侵攻。一家はインドへと疎開するが、その間、父親の乗った船が日本軍の爆撃により沈没し、ここで父親は命を落としている。母親は1945年にインドで英国陸軍少尉ケネス・ストッパードと再婚し、それ以後、トマーシュも義父の姓を受けてトム・ストッパードと名乗るようになる。彼は1946年に一家でイギリスへ移住した後、17歳で学業を終えると、新聞記者の仕事を経て、批評活動やシナリオ創作などを開始する。1966年に初演された舞台『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』は大きな評判を呼び、ストッパードの名を一躍世界に知らしめた。その後もストッパードは、『アルカディア』、『コースト・オブ・ユートピア』、『ロックンロール』など数多くの作品を発表しており、現代イギリス演劇を代表する劇作家として揺るぎない地位を築いてきた。また彼は、劇作品のみならず、共同執筆も含めていくつもの世界的ヒット映画の脚本も手がけている。中でもアカデミー賞で作品賞を受賞した傑作映画『恋におちたシェイクスピア』(1998)では脚本賞を受賞しており、映画ファンにも広く知られるところとなった。

2. 『レオポルトシュタット』 各国での初演記録

そんなストッパードの最新作にして、80歳を過ぎた劇作家自身が「最後の劇作品となるかもしれない」と言及したことから大きな話題を呼んだのが『レオポルトシュタット』(Leopoldstadt)である。この作品は、ウィーンに暮らすユダヤ人一家を軸に、戦争、ナチの支配、そしてホロコーストなど、19世紀末から20世紀半ばまでの50余年に及ぶ激動の時代を描いたものだ。2020年1月、同作はイギリスで世界初演されるや、たちまち大絶賛を浴びた。新型コロナウイルスの影響を受け、ほどなくして上演は一時中止となるものの、その年のオリヴィエ賞作品賞に輝くなど、高い評価を得た。そして同作は2022年10月、アメ

リカ・ブロードウェイでの初演を迎える。アメリカでも同作の評価は非常に高く、2023年6月に発表された第76回トニー賞では、演劇作品賞を始めとする四冠に輝いた。

『レオポルトシュタット』がアメリカ・ブロードウェイで幕を開けたのとほぼ同じ頃、東京・初台の新国立劇場中劇場にて、同作の日本語版が初演された（2022年10月14日～31日）。演出は同劇場の芸術監督である小川絵梨子氏、翻訳はストッパードの『コースト・オブ・ユートピア』も訳された広田敦郎氏である。後述するように、筆者はこの日本語版初演の千秋楽を鑑賞する機会を得た。ユダヤ人の過酷な運命という重苦しい内容を扱いながらも、随所にストッパードらしいユーモラスな場面も数多くちりばめられており、客席から笑い声があがることもたびたびあった。千秋楽ということで、俳優たちもそれぞれに役柄への理解を十分に深めていることがうかがえ、あたたかさが感じられる良い舞台であったと思う。

そして、ドイツ語圏での翻訳上演記録についてインターネットで調べてみると、アメリカや日本での初演よりも半年ほど早い2022年4月、オーストリア・ウィーンのヨーゼフシュタット劇場にて、ドイツ語圏で初となる上演が行われている。個人的に興味深いのは、ドイツ語への翻訳を手掛けているのが、小説『世界の測量』(Die Vermessung der Welt) で世界的に知られる作家ダニエル・ケールマンであることだ。独文関係者の一人として、いつかこの作品をドイツ語でも鑑賞してみたいと願うと共に、ケールマンによるドイツ語翻訳版が出版されるようなことがあれば、ぜひとも入手して読んでみたいものである。

3. 『レオポルトシュタット』 あらすじ

ここで、作品のあらすじを紹介しておこう。大勢の登場人物による膨大な量のセリフによって構成される作品とあって、あらすじという形ではまとめきれない内容も少なくないのであるが、作品の大まかな流れを確認していただけるものと思う。

第一幕¹⁾ 1899年12月のウィーン、リング通りに近いメルツ家のアパートメントの一室。婚姻関係で結ばれた二つのユダヤ人家族（メルツ家、ヤコボヴィッツ家）の面々が一堂に会している。子どもたちはクリスマスツリーの飾りつけを行い、大人たちは思い思いに会話を楽しんでいるところだ。この贅沢なアパートメントに暮らすのは、メルツ家の女家長エミリアおばあちゃん、その息子であるヘルマン・メルツ、その妻グレートル、そして夫妻の息子ヤーコプである。ヘルマンは祖父の代からの工場を引き継ぎ、裕福な暮らしをする実業家だ。彼は生まれながらのユダヤ人であるが、カトリックで非ユダヤ人のグレートルを妻に持ち、自身もキリスト教に改宗している同化ユダヤ人である。おばあちゃんは家族の古いアルバムをめくり、空白部分に名前や説明を書き加えている。ハンナ・ヤコボヴィッツは、義理の姉にあたるグレートルに、フリッツという名の将校に出会ったことをこっ

そりと打ち明けている。彼にすっかりのぼせているハンナは、フリッツと会うためのお茶会に、ぜひグレートルも同席してほしいと頼み込む。

第二幕 1900年。ハンナに懇願され、フリッツとの茶会に同席したグレートルであったが、フリッツの関心はハンナではなく人妻であるグレートルへと向けられる。それから二人はハンナに隠れ、逢瀬を重ねていた。そして、グレートルの夫であるヘルマンは、ある時、友人の誕生日の晩餐会で偶然にもフリッツと出会い、友人たちの前で「金持ちユダヤに嫁いだ人妻は、ユダヤでない男とのセックスに貪欲なんだ」といった、侮辱的な言葉を浴びせられる。彼は帰宅後も怒りが収まらず、決闘も辞さぬ覚悟でフリッツのアパートメントへと乗り込むが、そこで追い打ちをかけるように、妻グレートルの不貞の事実を知ってしまう。

その後、メルツ家に多くの親戚たちが集い、過越の祭の始まりを告げるユダヤの祝日、セデルが盛大に祝われる。

第三幕 1924年。エミリアおばあちゃんは寝たきりの状態である。第一次世界大戦を経て、かつてのような裕福な暮らしは昔話となり、今や国全体が貧しい暮らしを強いられていた。第一幕でクリスマスツリーの飾りつけに夢中になっていた小さな子どもたちは成長し、立派な大人になっている。メルツ家のアパートメントでは、ヤコボヴィッツ家の血筋の新生児ナータンに割礼の儀式が行われようとしており、人々がばたばたと慌ただしく走り回っている。その一方で、ヘルマンは銀行家を相手に、一家の事業を息子ヤーコブに譲渡するための相談をしている。

第四幕 1938年11月。以前は贅沢な家具調度品が所狭しと並んでいたアパートメントも、今やがらんとしており、暖房もなく寒々とした空気が漂っている。使用人はもういない。第一幕で戯れていた子どもたちの孫たちの姿が見られる。ユダヤ人を取り巻く状況は悪化の一途をたどっており、登場人物たちはそれぞれに不安を口にする。そこに、ドアを叩く鋭い音が響いた。鉤十字の腕章をつけ、ブリーフケースを提げた「市民」(転居担当官)が姿を現し、このアパートメントが第三帝国によって接収されたことを告げると共に、そこにいるメルツ家・ヤコボヴィッツ家の人々の名前を一人一人確認しながら、彼らに移送票を手渡していく。そして、ヘルマンに対し、彼が所有する工場やすべてのビジネスが国家の所有になることを認める書類へサインをするよう迫る。

第五幕 1955年。かつて、多くの人々が集っていたメルツ家のアパートメント。このだっ広い部屋に、一族の中で生き残った三人が集う。ウィーン大学の数学科に勤

務するナータン、彼のおばで精神分析医としてニューヨークで働くローザ。二人はヤコボヴィッツ家の血筋である。戦後、ローザは、かつてメルツ家が所有していたこのアパートメントを買い戻していた。そして、メルツ家の血を引く 24 歳の青年レオ。彼は、幼い頃にイギリスに渡り、今は作家となっている。レオはイギリス人の養父の元でイギリス人として育てられ、これまで自分がユダヤ人であるということをほとんど自覚せぬまま生きてきた。そんなレオに、ナータンは一族の歴史についてさまざまなことを話して聞かせ、ローザは家系図を書いてやるのであった。レオは家系図に記された家族の名前を一つ一つ読み上げ、ローザはそれぞれの人物の死因や亡くなった場所を言い添える。多くはアウシュヴィッツなどの収容所で命を落としていた。

4. 『レオポルトシュタット』 日本語版初演鑑賞記

2022 年 10 月 31 日、筆者は日本語版初演の千秋楽を鑑賞した。かねてより最良にしていた劇作家ストッパードの最新作ということで、早々にチケットを手配して鑑賞の時を待ちわびていたものである。

四世代、半世紀にわたる物語とあって、本作には子役も含め総勢 30 名近い俳優たちが登場する。そうなると、舞台上のやりとりだけで彼らの関係性を理解するのは至難の業であろう。公演のチラシには、あらすじに加え、二家族（メルツ家・ヤコボヴィッツ家）の家系図が掲載されているものの、これだけの人数ともなると、とても容易に把握しきれものではない。そこで筆者は、演劇雑誌『悲劇喜劇』2022 年 11 月号に掲載された『レオポルトシュタット』の戯曲を事前に読み、とりあえず大まかな人物関係を頭に入れた上で鑑賞することにした。もちろん、こうした予習なしで臨んだとしても楽しむことはできるだろうが、ストッパード作品はとにかく情報量が多いことで有名なだけに、予習して臨むことで、できるだけ多くの情報を確実にキャッチし、最大限に楽しんでやろうという魂胆である。

たとえば第一幕には、メルツ家のアパートメントで、ヘルマンの妻グレートルとヘルマンの妹のエーファが肩を寄せ合うようにして、こっそりと一冊の本を話題にしている場面がある。その本の中に描かれている大胆な内容を聞かされ、グレートルは仰天するのであるが、ここには独文関係者の一人として、思わず身を乗り出さずにはいられない情報が織り込まれている。

エーファ （グレートルに）……だから数珠つなぎに、二人ずつよ……「こんにちは」
——ズロースを下ろす——「さよなら」——「つぎ！」——「こんにちは」
——ズロースを下ろす——「さよなら」——「つぎ！」——

グレートル エーファ！

エーファ ——相手を替えてくよ、ロンドを踊るみたいに。

お気づきであろうか、タイトルこそ明らかにされていないものの、ここで二人の女たちが話題にしている本とは、世紀転換期のウィーンを代表する作家アルトゥル・シュニッツラーの戯曲『輪舞』(Reigen) に他ならない。ウィーンを舞台に、職業、身分、階層も異なる十人の男女が「性」を介して数珠つなぎになっていく様を描いた十景の会話劇である。『輪舞』は1896年から執筆が開始され、完成したのは1897年とされているが、そのあまりにも大胆な内容から、当時の舞台での上演はもちろん、戯曲として公刊することすら困難であった。そこでシュニッツラーは、1900年になって自費にて200部を出版し、これを知人に配布している。²⁾ こうした史実エピソードが、次のようにさりげなく会話の中に差しはさまれているのだ。

グレートル (エーファの本を手に) ここに「ルートヴィクへ」って――

エーファ その戯曲、アルトゥルは出版してもらえなかったの。ましてや上演だなんて、だから友人のために何部か印刷したわけ。ヘルマンに訊いてみて。

個人的な話になるが、筆者は学生時代、卒業論文および修士論文にてシュニッツラーの戯曲作品に取り組んでいたこともあり、『輪舞』の自費出版の件についてもよく知っていた。かつての自分の研究対象であったシュニッツラーの『輪舞』が思いもよらぬところで使われていることに気づき、思わずニヤリと笑みがこぼれてしまったものである。さらに、第二幕においては、エーファがグレートルに貸したこの署名入りの戯曲本が証拠となり、ヘルマンが自分の妻グレートルの浮気を知ることにも繋がる。『輪舞』は一つの小道具でありながら、劇の展開において密かに重要な役割を担っているのだ。

このように、『レオポルトシュタット』にシュニッツラーやその作品に関する情報が取り入れられているのには、興味深い背景がある。ストッパードは四十代の頃、シュニッツラーの戯曲『広い国』(Das weite Land) を“Undiscovered Country”というタイトルで、さらには『恋愛三昧』(Liebele) を“Dalliance”というタイトルでそれぞれ翻案し、舞台化しているのだ。ストッパードはこれらの翻案を通じ、シュニッツラーの作品に親しむと共に、世紀転換期のウィーンで繰り広げられる恋愛模様への理解を深めたものと思われる。残念ながら、今日、シュニッツラーの名前や彼の作品を知っている観客は決して多くはないであろう。知らないからといって、置いてきぼりにされるということは決してないものの、知る者にとっては、舞台上で交わされるセリフの向こう側にシュニッツラーの描いた世界が二重写しになるかのようで、作品にさらなる奥行きや広がりを感じられるのである。さながら、手の込んだ贅沢な料理に加えられた隠し味とでもいったところだろうか。

『レオポルトシュタット』においては、シュニッツラーの他にも、ジークムント・フロイト、テオドール・ヘルツル、グスタフ・クリムト、グスタフ・マーラー、フーゴー・フォン・ホーフマンスタールら、同時代のウィーンを舞台に活躍したさまざまな著名人の名前とそのエピソードが次々に話題にのぼる。セリフの中に織り込まれたこれらの情報を頭の中で

処理していると、これだけのビッグネームがずらりと並んだ世紀末ウィーン文化の爛熟ぶりに、改めて驚嘆させられる。そして同時に、彼らの多くが劇中の登場人物たちと同様、ユダヤ人であったという事実にも思いを馳せずにはいられない。

5. 「レオポルトシュタット」が意味するものとは

ところで、この作品のタイトルとして用いられている「レオポルトシュタット」であるが、これはオーストリアの首都ウィーン第2区の名称である。戯曲を読む前は、作品の主たる舞台がレオポルトシュタットに設定されているものと思い込んでいた。しかし、どうやらそうではないらしい。

ウィーンの地図で確認してみると、レオポルトシュタットとはウィーン旧市街の北部、ドナウ川とドナウ運河によって形成された細長い島である。一方、作品の大部分の舞台となるメルツ家のアパートメントは、具体的な地名は明らかにされていないものの、「リング通りに近い」というト書きやセリフなどから推察するに、市街の中心部、おそらくは第1区に位置しているものと思われる。レオポルトシュタットから見て、ドナウ運河を隔てた向こう側だ。

そもそもレオポルトシュタットとは、歴史的に見て、ユダヤ人が密集して暮らす地域であった。東方の貧しいユダヤ人がこの地に流入して根を下ろしたとされており、この作品が始まる19世紀末頃には、ウィーンのユダヤ人人口の3割強がここレオポルトシュタットに暮らしていたという。当時のウィーンのユダヤ人についてまとめたテキストを引用してみよう。

ウィーンのユダヤ人の世界は二つのまったく異なる世界が対立するように存在している。その一つはドナウ運河の北側、レオポルトシュタットに住むユダヤ人で、小市民的、プロレタリア的な、またはユダヤ正教派のユダヤ人世界。もう一つは、リベラルでオーストリア社会に同化した中・上流階級が住んだ南側の市街地（とくに1区は「シュタット」ともいわれる）と中流階級が住んだ環状線の内側の市街地、7区から9区及び市街地の境界線あたりの18区と19区のユダヤ人世界。この二つは、ほとんど共通点も互いの接触もない別な世界であった。（ブリジット・ティンマーマン『ユダヤ人のウィーン』³⁾

これを踏まえて、メルツ家の歴史を見てみよう。ヘルマンが次のように語る場面がある。

ヘルマン [中略] 俺の曾祖父は布地の行商人だった。その息子はレオポルトシュタットで仕立て屋を営んだ。俺の父親はアメリカから最初の蒸気式自動織機を輸入した。代々の苦労があつてこそ俺はのぼり詰めた。

目覚ましい事業拡大により豊かさを獲得したメルツ家は、遂にレオポルトシュタットを離れ、リング通り近くの瀟洒な建物へと居を構えることができたのである。劇中、ヘルマンが幼い頃に祖父から聞かされた屈辱的なユダヤ人差別について語る場面があるが、彼の曾祖父や祖父らの世代は、どれほど虐げられながらもウィーンにしがみつき、いつか自分の子どもや孫が豊かな生活を送れるようになることを願っていた。そうした先祖たちの思いを引き継ぎ、高い教育を受け、オーストリアに同化してきたヘルマンは、今や実業家としてウィーン社会に確固たる地位を築いた成功者だ。洗練されたウィーンの文化や芸術を愛好し、上流階級とも交流がある。

劇中で何度も名前が言及されるフロイトやシュニッツラーもまた、レオポルトシュタットからスタートし、後に運河を越えた向こう側、「もう一つ」のウィーンへと移り住んだユダヤ人であった。1860年、フロイトは4歳の時に家族と共にフライベルク（チェコスロヴァキア）からレオポルトシュタットにやって来て、結婚と共にこの地を離れて第1区に移り住んだ。一方のシュニッツラーは1862年にレオポルトシュタットで生まれ、その9年後、一家で第1区に引っ越すまでの幼少期をこの地で過ごした。

彼らのように成功したユダヤ人が後にしてきたレオポルトシュタット。しかし、ヘルマンら劇中の登場人物たちは、1938年11月、リング通りのアパートメントを追われ、強制的にこの地へと送られることになる。

サリー （グレートルに） わたしたちみんな通りに放り出されるのよ。（ヘルマンに）
わたしたちどこへ行くの？

ヘルマン レオポルトシュタットへ。[中略]

ナチ時代には、移送されるユダヤ人を仮収容するためのキャンプがレオポルトシュタットに設置されていたという。鉤十字の腕章をつけた「市民」から移送票を受け取った登場人物たちは、おそらくはまずレオポルトシュタットへと送られ、そこからアウシュヴィッツなど各地の強制収容所へ運ばれたものと思われる。そして、メルツ家の家長であるヘルマンの最期については、作品の最終場面においてナータンの口から「レオポルトシュタットの安アパートで階段の吹き抜けに身投げした」ことが明らかにされる。1939年、過越の祭りのことであった。

このように、『レオポルトシュタット』において、レオポルトシュタットという地名は何度か言及されることはあっても、その地が舞台上に登場することは一度もない。また、ヘルマンら登場人物たちがレオポルトシュタットに対してどのような思いを抱いていたのかがわかるようなセリフもない。したがって、ストップワードがなぜこの作品に敢えて『レオポルトシュタット』というタイトルをつけたのか、明確な答を見つけにくいところだ。

「レオポルトシュタット」というタイトルが意味するところについては、さまざまな解釈が可能であろう。まず一つには、作品の中心的登場人物ヘルマンにとっての始まりの地であ

ると共に終わりの地でもあることから、ウィーンのユダヤ人がたどった一つの歴史を象徴するものとしてとらえることができるかもしれない。

そしてもう一つが、この作品にこめられた、作者ストッパードの自伝的要素と絡めての解釈である。本コラム冒頭にストッパードの生い立ちを記したが、ストッパードはチェコスロヴァキア出身で、母親の再婚後、イギリス人の養父の元でイギリス人として育った。彼がユダヤ人としてのルーツを知ったのは、50代になってからのことであったという。こうしたストッパード自身の生い立ちをほぼそのままなぞるかのようにして作り上げられた登場人物が、『レオポルトシュタット』の第五幕、1955年の場面に登場するレオである。レオはヘルマンの姪ネリーの息子で、イギリス人養父パーシー・チェンバレンと共にイギリスへと脱出し、イギリス人として育てられ、現在は作家として活動している。彼は、自分がユダヤ人であることを知ってはいたものの、イギリス人として生きるにあたっては、自らのユダヤ性を意識する必要はまったくなかった。しかし戦後、彼が「イギリスのユーモア作家の公開討論会」に出演するためにウィーンを訪れることを新聞で知ったローザから連絡を受け、彼はウィーンのアパートメント（かつてのメルツ家）でローザ、そしてナータンと対面する。二人の親戚から一族についてのさまざまな話を聞かされる中で、1938年11月、メルツ家のアパートメントが第三帝国に接収されたまさにその瞬間、幼かったレオもその場に居合わせていたことが明らかになる。彼は自分の中に連綿と受け継がれてきたユダヤの血が存在することに対し、この時に至って初めて思いを馳せるのであった。

レオがイギリス人「レナード (Leonard) ・チェンバレン」となる前、ウィーンに住んでいた頃に名乗っていた名は、「レオポルト (Leopold) ・ローゼンバウム」。24歳となったかつての「レオポルト」は、ローザの書いてくれた一族の家系図をたどりながら、自分とは何者であるかを知っていくことになるのだろう。ストッパード自身も経験したであろう自らのルーツをたどる旅。作者ストッパードの分身のごとき「レオ (レオポルト)」という人物の名前にかけて「レオポルトシュタット」なるタイトルには、そんな「自分とは何者か」という普遍的な問いかけを象徴する意味合いもこめられているのかもしれない。

6. おわりに

2023年、「ナショナル・シアター・ライブ in JAPAN 2023」と題し、『レオポルトシュタット』のロンドン公演の様相を収録した映像（日本語字幕付き）が全国の映画館で上映された。筆者は1月に池袋、そして6月に六本木の上映館にてこれを鑑賞した。六本木での上映は、トニー賞受賞を記念してのわずか一日だけの上映だったのであるが、事前の宣伝や告知があまりなかったにもかかわらず、ほとんどの座席が埋まる盛況ぶりであった。

『レオポルトシュタット』は、アメリカの映画監督スティーヴン・スピルバーグが映像化の権利を獲得し、ドラマ化されることが決まっている。ロンドン版とブロードウェイ版で演出を務めたパトリック・マーバーが脚色を手がけ、『愛を読むひと』（ベルンハルト・シュリ

ンクの『朗読者』の映画化)のステイブン・ダルドリーが監督を務めるという。権威ある演劇賞を立て続けに受賞した本作が、世界的に有名なスピルバーグの指揮の下でドラマ化されるとなれば、これは大きな話題を呼ぶことだろう。また、今後もさまざまな劇場で上演される機会もあろうと思われる。ぜひとも独文関係者の方々にもおすすめしたい、注目すべき作品である。

(五十嵐 豊 大東文化大学非常勤講師)

注

- 1) 本稿における戯曲『レオポルトシュタット』からの引用は、すべて演劇雑誌『悲劇喜劇』(早川書房)2022年11月号による。同誌に掲載された広田敦郎氏による翻訳の底本は2021年のロンドン公演の上演台本ということであるが、その後さまざまな変更が加えられたとのことで、2022年10月の新国立劇場における日本語版初演の上演台本とも異なる箇所がある。また、2020年にFaber & Faber社から出版された英語版戯曲では「幕 (Act)」という区切りは使われておらず、Scene One から Scene Nine までという形で区切られている。
- 2) シュニッツラーが『輪舞』を自費出版して友人たちに配ったのは1900年になってからとされているが、『レオポルトシュタット』第一幕は1899年12月と設定されており、時間的にわずかなずれが見られる。
- 3) 『WIEN 性のワルツ』(PARCO出版、1993)所収。

0196

作成日 : 2023/10/05